

豊中（インクルーシブ教育）の方へ

連載：動かなかったものを動かす 2

メインストリーム協会

井上 武史

前回7号の連載よりつづく（連載：1「コスタリカ（のプロジェクト）を&から動かす」[PDF版] <https://aru.official.jp/m/007001inoue.pdf>）

1. リメンバー7.26 神戸アクション

私は、10月16日にこのシーズンのコスタリカでの赴任を終えて日本に一時帰国した。そして、まず出かけたのが、その1週間後の10月23日に神戸三宮で開催された「リメンバー7.26 神戸アクション」★01だった。これは、神戸の自立生活センター「リングリング」の石地かおる★02と兵庫県精神医療人権センターの吉田明彦が呼びかけ人となった活動で、「相模原障害者殺傷事件」の翌月より毎月街頭で抗議とアピールを行っていた。吉田とは初対面であったが、石地とはよく知った仲だった。彼女が所属するリングリングの代表中尾悦子が2011年2月に私たちのプロジェクトに先立って実施されていたプロジェクト Kaloie より招聘されコスタリカでピアカウンセリング講座を開催していた★03。そのため、2012年に私たちのプロジェクトが開始した後、まず彼女たちにモルフォセンターのピアカウンセリングのリーダー研修を依頼し、約一ヶ月間サーナというスタッフを預けたのだった。そして、帰国時にコスタリカの様子を報告に行く、そんな関係を保っていた。事件後毎月 Facebook ★04 に流れて来る呼びかけに、ぜひ行って連帯の意志を示したいと思っていた。

日曜の午後で曇っていた。JRと阪急電車、阪神電車という、阪神間を東西に走る三つの路線が重なる三宮駅南側の丸井前でアピールは行われており、休日の買い物に来ている人の波がその前を通り過ぎて行っていた。障害当事者や支援者がマイクを使ってアピールをし、私にも回って来たので何か話したと思う。しかし人々の関心は薄く、それらのアピールがどこまで届くのだろうかと考えていた。それはあの有名な原一男の『さようなら CP』の冒頭のシーンにあまりにも酷似しており、私が思ったのは、「ここまで戻る必要があるだろうか?」ということだった。「われらは、問題解決の路を選ばない」とした青い芝のあの時代の後、私たち障害者運動には自立生活センターの経験があり、石地は其中でもピアカウンセラーとしても一廉の人物になっていたはずだった。彼女の持っている影響力などを考えれば、「もっと別の動かし方があるはずだろうか?」。そんな印象を持って帰っていた。そして翌年6月に彼女に Messenger ★05 でこんな

メッセージを送った。「もう1年ですね。あれから色々考えながら過ごして来ましたが、自分なりの答えとして西宮でインクルーシブ教育を進める活動をすることにしました。すでに色々な人につながりはじめていますが、そもそも分けられていない社会を目指してがんばろうと思っています」。

2. ビッグクラブへの移籍

2010年5月、「メインストリーム協会」は阪神・淡路大震災後に建てた旧事務所より、JR西宮にほど近い現在の事務所に移転している。今ではスタッフも増え手狭に感じられるが、元の事務所より数倍の広さがあった。創設者である廉田俊二、当時事務局長であった佐藤聡(現在、DPI日本会議)らが設計段階より細かく関わり、彼らの夢が詰まった新事務所であった。

これと機を同じくして、大阪府豊中市にある「CIL 豊中」★06より一人の青年がメインストリーム協会へ「移籍」している。鍛冶克哉といい脳性麻痺である。車椅子に乗っているが、つかまるところがあれば、かろうじて立つこともでき床を這って移動することもできる。言語障害がなく、それを最大の武器として人の心をとても上手につかまえている。講演も多くこなし、2012年9月に玉木幸則★07が退職した後はメインストリーム協会でも多くの講演を依頼されている。

後に彼自身から聞いたところによると、「移籍」の前年からメインストリーム協会に顔を出していたということだが、彼に関する私の最初の記憶は、阪急電車の高架脇にあった旧事務所から徒歩で数分行ったところに、障害者の日中の居場所として作業所名目で借りていたマンションの一室であったパーティーだった。やんちゃな健常者スタッフに「いじられて」床に転がっており、坊主頭をしていたので「和尚」とあだ名されていた。

鍛冶は、こうした表に現れるキャラクターからは想像がつかない大志を内に秘めていて、フツとした瞬間にそれが漏れるのを見て、私は驚き、しばしばそのギャップをどう埋めればいいのか戸惑うこともあった。そしてその頃のメインストリーム協会への訪問は「移籍」を前提にした「偵察」でもあり、注意深くここで自分がやれるかどうかを吟味していたのだという★08。私たちのところに来た当初からよく自立生活センター界の「ビッグクラブに移籍」したと言っていたので、CIL 豊中がさぞ弱小チーム然とした規模のセンターであるかと想像させてしまうが、それはまったく勘違いもはなはだしい。むしろ、彼の「移籍」先よりもずっと大きく、ここに並ぶセンターは他にあまりないと言っていいくらいだ。

もちろん1993年に発足し、2002年に支援費制度の開始を射程に入れて法人化したこのセンターが一挙に現在の規模の自立生活センターとなったわけではない。私たちがよく知る「ピアサポート」や「介助派遣サービス」の他にも、CIL 豊中では「訪問看護ステーション」「障害児(者)通所施設」「点字名刺事業」や、リフト車による「豊中市障害者外出支援サービス事業」などかなり幅広く事業を展開しており、それらをみな地域で最初に手がけたとあるので、こうしたサービスが国や自治体で委託事業化されることを見通して着実にその規模を拡大して来たのがわか

る。

豊中の障害者運動の世界では、何といても入部香代子★09 がよく知られている。施設時代をともに過ごした金満里に誘われて「グループ・リボン連合会（後の青い芝の会）」に入り、優生保護法交渉、養護学校義務化反対運動、川崎バス闘争、和歌山センター闘争など青い芝のほとんどの闘争に参加している。1991年には、豊中市で「全国初の車椅子の女性市会議員」となって、4期16年にわたり議員を務めた。1996年に、入部が二日市安、楠敏雄とともに呼びかけ人となって結成された「障害者の自立と政治参加をすすめるネットワーク」★10は、現在の参議院議員、船後靖彦、木村英子に至るまで活動を継続している。

そして入部は、1976年より「AZの会」を立ち上げている。「AZ福祉工場設立準備委員会」として開始したが、イメージしていたのは現在の自立生活センターのようなもので、「福祉工場といっても本当に労働するのではなく、自立トレーニングや人間関係づくりをやったうえで、1、2年そこにいて地域に自立する方向に促そう、そういう考え方だった」★11。鍛冶によれば、入部が議員になるため、初代の代表であった大友章三に前身となる「障害者自立生活援助センター・とよなか」の設立を託したといい、実際CIL豊中は大友の自宅を事務所にして出発している。現在のような事業の展開を見せるのは、法人となり代表が徳山辰浩に代わった2002年以降である。

鍛冶はCIL豊中で、「豊中市障害者外出支援サービス事業」による移送サービスの配車担当として働いていた。「その当時は健常者の彼女とかもいて、完全にプライベートと仕事をわける人やって」といい、「障害者のやる仕事やないな」と思っていたという。同じ職場の7歳年長である上田哲郎とともに、この豊中の人権運動の中から生まれた、一つの社会の中で健常者も障害者も分け隔てなく学び育つ「ともに学び、ともに育つ」という教育を受けて来た経験を、運動として広げていきたいと考えていた。職場のさらに年長の障害者スタッフが教育を受けた時代にはこうした豊中の取り組みはまだ始まっておらず、彼らと同世代の健常者スタッフにはこの教育方針の下で育って来た職員もいるにはいたが、「豊中ではこれがあたり前すぎて運動になるとは思われていなかった」という。

鍛冶はこうした職場環境の中でなかなか思うように活動できず、「人生を変えたいな」と思っていた頃、2009年に「全国自立生活センター協議会」(Japan council Independent Living Centers、以下、JIL)の関西ブロックで実施された合宿に参加した。ここで、メインストリーム協会の筋ジストロフィーのスタッフである藤原勝也と出会った。これは彼にとって「運命的な」ものであり、これによって彼の「自立観」が完全に変わったという。その頃、鍛冶は大阪の他団体へ移ることも選択肢として考えていた。けれども、大阪の障害者団体はすべて「障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議」(略して、障大連)の傘下にあり横のつながりが強いので、「めんどくさそう」と考え、以降ターゲットをメインストリーム協会1本に絞りアプローチを始めた。

詳細は省くが、代表廉田にも話をつけ、鍛冶は西宮メインストリーム協会で受け入れられることになった。CIL豊中の代表徳山、初代の代表大友、さらに臨時で代表を務めたこともありセンターの顧問的な存在であった入部も同席した場で、「移籍」の意を伝えたところ相当な慰留があ

り、「給料を二倍出す」とまで言われて引き留められたそうだが、鍛冶の決心は変わらなかった。

3. 知的プロジェクト

鍛冶は、2010年の年度始めからメインストリーム協会働くことを目指していたが、CIL豊中での残務処理などもあり、ちょうど新事務所の開所が5月だったので、ここで合流した。私はこの年より2年間、コーディネーターとして事務所での勤務をすることになった。新築の匂いのする広々とした事務所で、私自身新しい仕事を始めるわくわくした気持ちだった。年齢もずっと年長で、メインストリーム協会でのキャリアも私の方が長かったのだけれども、私と鍛冶は新しい事務所で新しい仕事を始めた、お互いどこか同期的な感覚があった。施設を訪問する際にはハイエースを運転して出かけ、ともに活動することも多かった。

この年の10月、メインストリーム協会の評議会メンバーである知的障害者の母親より、娘の西宮での自立相談があった。その頃私たちが職場より受けていた説明によると、西宮では、知的障害者、精神障害者、身体障害者に対する支援を別々の組織が分担していて、それぞれ「一羊会」★12、「ハートフル」★13、そしてメインストリーム協会が担っているということだった。しかしながら、グループホームではない単身での自立生活のノウハウがあったのは、身体のメインストリーム協会だけだった。とはいっても、それは介助者に特別な資格や能力がなくても、障害者の指示を受けてそのとおりにやればミッションが達成されるという、身体障害者を想定したモデルから出発したものであり、私たちにしても、コミュニケーションが取りづらい障害者への介助派遣の経験はなかった。当時、事務局長であった佐藤は、障害者スタッフとコーディネーターなど内勤のスタッフにプロジェクトを作って支援の可能性を探ることを指示し、私はその中の一人となった。

翌月に入ってすぐに第1回目の会議があり、まずは分担して情報収集をすることなどが話し合われた。私はこれと並行して、すでに京都で「ピープルファースト」の支援を開始していた「日本自立生活センター」の渡邊琢★14に連絡し、東京で知的障害者の自立生活を先行して行っているいくつかの団体の情報提供を受けた。そしてそれをもとに、翌年3月に多摩市の「たこの木クラブ」★15、小平市の「自立生活センター・小平」★16、東久留米市の「自立生活センター・グッドライフ」と、支援している「ピープルファースト東久留米」などを視察して回った。当時、小平で始まっていた強度行動障害を持った自閉症の青年の支援がJILのセミナーで紹介されたり、ピープルファースト東久留米からは『知的障害者が入所施設ではなく地域で生きていくための本』（ピープルファースト東久留米 [2010]）なども出版されており、身体障害者の自立生活がひと段落して、次の段階へという空気が出だした頃だった。

2014年に入り、私は鍛冶をこの「知的プロジェクト」に誘った。鍛冶はメインストリーム協会に、西宮の生活に徐々に慣れ、少しずつ根を生やして活動を広げているところだった。豊中市のようなインクルーシブ教育を実現するための活動を始めてはいたが、まだ大きく看板をかかげて展開するまでには至っていなかった。また西宮市の教育は、「発達保障論」をもとにした分

離教育を進める立場であったため、自ら受けた教育とのギャップに衝撃を受けてもいた。そして、地元豊中市では整備されたインクルーシブ教育が実現しているにもかかわらず、それが障害者の地域生活へとつながっていない。一方、西宮市ではメインストリーム協会や、重症心身障害者への手厚いケアがある「青葉園」★17 など、充実した地域生活の実態があるが、一番大事な幼少期からの教育では完全に分離されてしまっている。このチグハグさは、いつも私たちの議論のテーマとなっており、彼を誘ったのはこのチグハグさを、西宮市では少しでも解消できればという期待を込めてだった。

4. インクルーシブ教育の方へ・1

結果的に私は、本稿の冒頭で触れたリングリング石地へのメッセージにあるように、2017年春頃から鍛冶とともに西宮市でインクルーシブ教育を進める活動を始めることになる。2016年に相模原事件があり、同じ年にコスタリカのプロジェクトで介助派遣サービスを国の制度として可能にする法律を制定し、それを日米のリーダーに披露する機会もあった。相変わらず日本とコスタリカを往復する生活をして、私は概ね次のようなことを考えていたと思う。

- 1) コスタリカで法律ができたときには、よく理由はわからないものの、それが国民の合意でできたという空気があった。
- 2) 日本でもそうした合意を目指した大きなシステムの変換が必要である。
- 3) 自分は日本で地に足をつけた活動はできない状況にあるが、コスタリカでの経験をもとにしてこそできることもあるはずだ。
- 4) 教育はあらゆる人に関わるシステムの根幹であり、これが変われば社会も大きく変わる。また変わらないとおかしいはずである。
- 5) コスタリカでは国の制度を作ったが、日本の教育全部を変えることは無理でも、西宮市という枠組みでならできるかも知れない。

そして、私がコスタリカでプロジェクトのために多くの時間を過ごすようになった期間は、第2次安倍政権とほぼ重なっている。ニュースを通じて見る、遠くの祖国の民主的な手づぎが次第に崩壊していく様子を、どうしても目の前のコスタリカの健全な民主主義と比べずにはいられなかった。目指すべき西宮市全体で合意を取るという作業が、失われていく民主主義を再構築することにつながるだろうとも考えていた。

やりたい意欲は満々であったものの、なかなか一步を踏み出さなかった鍛冶に対して本格的に始めるよう促していたところに一つの転機になる出来事があった。2017年2月18日に、毎年この時期に開催される豊中市の教職員組合と毎日新聞社が主催の「インクルーシブ教育を考

えるシンポジウム」の第15回目である。鍛冶が、立命館大学の立岩真也らとともにパネリストとして招待されていた★18。鍛冶は「裏切りもの」とすら言われ追われるように豊中を後にしているが、CIL 豊中を辞めた直後からこうした催しには声がかかり、きちんと豊中市の人脈は保っていた。

主催が毎日新聞社であったため紙面で大きく取り上げられ、それを見た市内のある団体のスタッフがメインストリーム協会に彼を訪ねて来た。「全国青い芝の会」によって設立された「阪神障害者解放センター」から発展した「障害者生活支援センター・遊び雲」★19の栗山和久であった★20。西宮では、医療的ケアを必要とする障害のある子どもの「地域の学校で学びたい」という願いを応援する取り組みを発展させ、2016年3月に「インクルネット西宮」★21が活動を開始させていた。障害を持ったある児童の就学支援を栗山が行っており、これが発展して団体となり、栗山はその役員を務めていたのだった。

2017年当時でも、インクルネット西宮はまだ支援グループから団体になるかならないかくらいの時期だった。親は子供のことで手一杯であることや、支援者はあくまでも支援者であるため、やはり障害者の問題は障害者が担っていくのが望ましいなどという議論がインクルネット西宮内でなされ、4月の役員会で合意を取り、鍛冶に代表への就任を要請するために栗山が訪ねて来たのだった。鍛冶はこのとき代表を務めることは固辞したものの、メンバーの一人として活動することを決め、これをきっかけに彼の西宮でのインクルーシブ教育を進める活動が始まった。

5. インクルーシブ教育の方へ・2

冒頭に触れたように私は2016年10月16日に帰国し、このときの滞在はとても短く、一ヶ月にも満たないもので、翌月5日には日本を離れコスタリカへ戻っている。しかし、この短い滞在中でも、私は友人の山之内俊夫★22の職場「障害者自立支援センターYAH! DO みやぎき」★23を訪ねている。これは、コスタリカでの法律制定後初めて自分の職場以外でコスタリカでの仕事を紹介する機会だった。

コスタリカに戻ると、今度は法律制定をお披露目する国際自立生活セミナーが首都サンホセで開催される予定であった。日米の自立生活センターのリーダーたちが参加し、法案の提案議員であったアナ・エレナ・チャコン副大統領★24をはじめ錚々たる招待客を招いていたため、その準備に忙殺された。

関連の行事も含め、こうした一連の活動が11月末で一段落した。そのため私は、12月に入って自分へのご褒美としてメキシコへ一週間ほどの旅行に行った。モルフォセンターの代表ルイス・カンブローネロとは国際自立生活セミナー関連の日程をともにしており、少し体調を崩していたのは知っていたが、その後入院したと聞いた。そのうち本人抜きのWhatsAppグループが作られ、そこでどんどん悪化していく様子が伝えられてき、メキシコ旅行からコスタリカに帰国してサンホセのホテルで休んでいた深夜、同僚からの電話で訃報の知らせがあった。最高の瞬間から最悪の瞬間へと、まるでジェットコースターに乗っているかのように、あまりにも短い期間

に様々な出来事が詰め込まれていた。

クリスマスのコスタリカで過ごした後帰国し、年末年始はいつものように介助者として働いた。年が明けて2017年、私は今度は、茨城県つくば市の「つくば自立生活センターほにやら」★25を訪問している。事務局長である斎藤新吾とは、前年6月に知り合っている。モルフォセンターのウェンディが、メインストリーム協会の研修で来日して市谷にあるJICA本部で講演する機会があり、彼がそこに参加していたからである。斎藤は、2016年11月にコスタリカであった国際自立生活セミナーにも日本の訪問団の一人として参加していた。2017年は、2003年の支援費制度導入を視野に入れて全国で立ち上げた自立生活センターがちょうど15年を迎える年であり、それぞれで記念する催しが開催されていた。斎藤から彼の自立生活センターの催しに誘われ、行ってみることにしたのだった。

私はそこで古い友人と再会している。2021年12月24日に亡くなった海老原宏美だった★26。私は彼女と2001年7月から8月にかけて韓国で行われた「日韓 TRY2001」という活動で知り合っている。これについては、海老原自身が彼女の2つの著作『まあ、空気でも吸って』『わたしが障害者じゃなくなる日』の中で、自立生活運動に身を投じるきっかけになったイベントとして記している。真夏のこの期間、約一ヶ月かけて、韓国の釜山からソウルまでの500kmを野宿しながら歩くというものだった★27。翌年の2002年に日韓で共催されるワールドカップのために建設中のスタジアムや鉄道の駅のバリアフリーチェックをしながらである。これは、ダスキン愛の輪基金で1999年より実施されている「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」★28によって、2000年に韓国より来日し研修を受けたソー・ミンス★29が帰国後企画したもので、当時のメインストリーム協会のスタッフとともに準備して実現したのだった。

「野宿」というものは、現在、日本の人々にどの程度理解されるだろうか。当時のメインストリーム協会の作業所では、それまで日本国内で行って来たTRYの横断幕が壁一面に広げて張られていたり、誰かが海外に行ったときの戦利品が雑然と転がっていたりしたりして、「旅」を感じさせる空気が漂っていた。私は当時、アルバイトの登録介助者に過ぎず、それほど深くメインストリーム協会にコミットしていたわけではなかったが、おそらくこうした「旅」の「自由」な雰囲気、コミットしないまでも、離れずにそこに居つづけさせていたのだろうと思う。私は、その頃介助に入っていた筋ジストロフィーの学生がこのイベントのための募金に毎週末行くのに自ずとつき合うことになっており、その流れで誘われるがまま参加することになったのだった。バックパッカー上がりの介助者にとって、障害者とともに行く「野宿の旅」というのは、これほど魅力的に見えるものはなかったのである。

海老原とはおそらく、関西空港からソウルに渡るために、空港へと移動するJRの駅で初めて出会っている。私はつねづね、障害者/健常者は、ここからあちらと明確に分けられるわけではなく、障害者=マイノリティと簡単に結びつけられるわけでもないと言っている。海老原には西宮を出発するときからテレビのクルーが取材のため付いており、つねにカメラが向けられていた。彼女は人生を通してスポットライトと注目を浴びたと私は考えているが、それはもうすでにこのときから始まっていたのである。私には彼女は眩しく、どこか気圧されるような感覚を彼女

が亡くなるまで持ちつづけていた。

彼女は、この「旅」をきっかけに東京の東大和市で自立生活センターを設立し、私はこのイベントに参加したことをきっかけにメインストリーム協会とのコミットメントを深め、2004年に誘われるがまま職員となった。二人にとってこれがなければその後の人生はなかったというイベントだった。立場は違えども同じようにこの業界でキャリアを重ねて来たのだと気づいたのは、つくば自立生活センターほにゃらの15周年の催しで、埼玉「くればす」の見形信子★30、横浜「自立の魂」★31の磯部浩司らとともに、海老原が舞台でこの15年を振り返っているときだった。

2017年5月、私が鍛冶と西宮でインクルーシブ教育の活動を開始したのと同じ頃、Facebookに一つの投稿を見つけた。それは海老原が東京都でインクルーシブ教育を推進するためのプロジェクトを立ち上げるというもので、「東京インクルーシブ教育プロジェクト」★32と命名されていた。6月3日から4日にかけて京都でDPI日本会議全国集会在開催され、教育の分科会「地域でインクルーシブ教育を実体化するために」のスピーカーの一人として彼女は公の席で早速、地元東大和市での知的障害児の就学支援の経験を発表している。そしてその翌週11日に、自立生活センターの障害当事者を中心に、自らの問題として取り組んでいくという主旨でこのプロジェクトを正式発足した。「えびちゃん」が東京の仲間とインクルーシブ教育の活動を開始した。この世界での彼女の影響力を考えるとそれはとてつもなく大きな出来事に思え、相模原事件以降何かをしなればと憑りつかれたように動きだしていた私をさらに突き動かしていった。西宮→東京という線が引けた。もう1点探して線を引けば面となるだろう。広く面を作れば、それだけ高い塔をその上に建てることができるだろう。そんな風に考えていた。

鍛冶によれば、海老原が教育に力を入れたいと考えたことにも相模原事件が影響しているという。彼女の死後に新装され再版された著書『まあ、空気でも吸って』には、事件から5年経ち彼女があらためて振り返って語ったラジオ番組が再録されており、こう語っている。「でも、『どんな人もみんな一緒に生きていくんだよ』っていうことを教えているにもかかわらず、学校には障害のある子がほとんどいないんですよ。障害のある子はこっちの学校に行きましょう、障害の子はこっちの学校に行きましょうと、分離されて育てている中で、『誰もが共に』と言っても、具体的なイメージが湧きにくいと思うんですよ。だから、ネットでは植松氏への賛同の声を上げた人たちは、ある意味正直なのかなっていうふうにも思いました」(海老原・海老原[2022:243-244])。

鍛冶に豊中市でどう育って西宮までやって来たのかをインタビューしていると、海老原との共通点がとても多いことに気づかされる。ともに「スパルタな」母親に育てられ、普通校で周りの友人たちと良好な関係を結んで、彼らに支えられながら、海老原のいわゆる「人サーフィン」に乗って卒業までを送ることができている(海老原[2019:54-59])。そうした環境でそれがあたりまえだと考えていたが、いざ就職するときになって壁が立ちはだかったという経験も共通している。鍛冶は定時制高校を卒業後、正社員登用の道もあるというケーブルテレビ会社のアルバイトに申し込み、面接を受けにいったが、「車椅子の人が来たので会社の人の目が点になった」

という話を半ば笑い話のように今では言う。けれども、この経験が彼を CIL 豊中で働こうという気持ちにさせたのだった。

しかしながら、少なくとも彼らにとって学校生活は、「ともに学び、ともに育つ」とても楽しくポジティブなものだった。おそらく自らの経験から、誰もが同じように分離されずに学校に行くことができれば、障害者でも「社会性を身につけた社会の一員となれる」と考えていたのだろう。その後「東京インクルーシブ教育プロジェクト」が進んでいき、そこに「障害当事者」が参画するがそこには分離教育を受けたものもいた。分離教育に反対するものもいれば、それをよしとするものもいて、「当事者」といってもまったく一枚岩ではないことがわかってくる。

さて、2017年の2月3月にコスタリカで年度末の精算作業を済ませて一旦帰国した後、今度は7月12日に日本を離れコスタリカに戻った。前年に「障害者の自立法」を成立させたインパクトはまだ拡大中だった。この赴任での最も大きな任務は次のようなものだった。コスタリカのモルフォセンターの代表ウェンディと、ボリビアの自立生活センターの代表フェリーサとが、Nacional Council on Independent Living (略して、NCIL、日本のJIL全国自立生活センター協議会のアメリカ版にあたる全国組織) ★33の総会に伴って開催されるセミナーの一分科会に招待されたため、これに同行することだった。ボリビアの自立生活センターは、メインストリーム協会が、アジアの自立生活センター以外で唯一、直接資金を出して支援している組織である。この分科会では、DPI 日本会議の佐藤のイニシアティブで結成された The World Independent Living Network (略して、WIN) と呼ばれる世界的な自立生活センターのネットワーク★34の創立が紹介されることになっており、ウェンディとフェリーサはそのために招かれたのだった。

私はウェンディと介助者のカテリーンとともにコスタリカを離れ、途中悪天候による経路の変更などトラブルに見舞われながらヘトヘトになってワシントンに到着した。ウェンディやフェリーサの出番が終わるまでは余裕がなかったが、一段落すると「こんなふうに日本の自立生活センターのリーダーたちが一堂に会する機会はそのようなはず」ということに気づいた。そこで、手当たり次第に「東京でえびちゃんも始めたんだからみなさんもいっしょにやりましょう」と、それぞれの地域でインクルーシブ教育を進めるよう話して回っていた。

シカゴの Access Living★35 の創設者マーカ・ブリスト★36 やダラスの Reach のジュリー・エスピノザ★37 らは前年コスタリカを訪れており、彼らともこの分科会で再会した。総会とセミナーはワシントンで7月23日から29日まで開催された。私は閉会後の翌日から8月5日までフェリーサに同行して、セントルイスの自立生活センター、Paraquad★38 を訪問している。中西正司がヒューマンケア協会を創立する前に視察に行った、あの自立生活センターである。

時をかえってこの2年前の2015年は、Americans with Disabilities Act of 1990(略して、ADA、「障害のあるアメリカ人法」) ★39 成立の25周年にあたり、JIL と DPI 日本会議の企画によって、記念の催しに日本からも自立生活センターに所属する多数の障害者スタッフが渡航して参加した。日本に自立生活センターが設立されだした80年代から90年代初め頃までは、日米の障害者リーダーの交流は盛んであったが、私がこの世界に関わり出した90年代後半にはほとんどなくなっていた。これが再開したのには、おそらく当時の佐藤の意向が大きく影響しているだ

ろう。

2013年6月に障害者差別解消法が成立し、これを人生の目標にしていた彼は、『『自分はこれから何をして生きていったらいいのかな』って、若干目標見失っていた』状態だった。そのときに、現在 JIL 事務局に勤める盛上真美に、「ADA の生みの親である、ダスティン・ダート夫人、ヨシコ・ダートに会いに行くこと」を勧められる。2013年9月だった。4日間30時間にわたりダート氏がこの法律に賭けた思いを聞いた。法律制定の経緯についての話しもさることながら、当時まだメインストリーム協会で働いていた彼が、アメリカの野球スタジアムの観客席の車椅子席数が、日本とくらべて桁違いに多いことを興奮気味に話していたことをよく覚えている★40。佐藤は翌年メインストリーム協会を退職し、DPI 日本会議の事務局長として東京で働くことになるが、自分が感じた思いを若い世代に伝えようと、ADA25周年のツアー、さらに2017年のADA27周年のツアーを企画している。

6. 「移動の技法」

このワシントンからセントルイスへの移動と、日米、そしてラテンアメリカの自立生活運動のリーダーたちと過ごした日々した後、私はコスタリカの日常に戻り、そして2017年10月12日にはまた日本に帰国した。本連載の第1回目冒頭で、私は「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」は、「私が日本とコスタリカを往復する『運動』の中から発案され生まれている。しかも、準備がここに向けて一直線に進んだわけではなく、その間のさまざまな人たちとのほとんど偶然と言っていい出会いによって紆余曲折を経てたどり着いている」と述べたが、実際どのような「運動」であったのかが、少しずつ明らかになって来たかと思う。

権藤真由美が論文にしたように、職場の代表廉田が車椅子で「旅」をした経験がその後の障害者運動に結びついている（権藤 [2022]）。そしてその彼が創立した団体には「旅」を連想させる自由な空気があり、それが私をメインストリーム協会から離れさせなかったこと、そして職場が企画した韓国でのイベントに参加したことがより深く関わるきっかけになったことも述べた。2004年に職員となり、2006年に初めて仕事で海外に行くことになった。それは、カトマンズで立ち上げた自立生活センターの記念の催しに職場の同僚とともに参加するためだった。2004年に「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」でネパールから来日し研修を受けたクリシュナ・ゴータムが、帰国して2年後にカトマンズで自立生活センターを立ち上げたのである。私はこのとき身体中の血が逆流するのではないかというくらいの興奮を味わっている。それは、一般の旅行ではもちろんのこと、そこから外れてもう少しオリジナルな「旅」を目指しても得られるようなものではない。その国の最も生々しい場所にダイレクトに通じる秘密の通路を見つけたような感じだった。

以降、国内でも海外でも私が出かけるときには、「障害者」というターゲットがあり、それがなくては私はどこへも行かないし、行くこともできない。仮に行ったとしても、そこで何をしたいのかわからないくらいだ。そうなるそれはもう「旅」と呼べるものではないだろう。それ

は明確な目的を持った「移動」に過ぎないのである。けれども、今どこに誰に会いに行くべきなのか？そして今度はそれをどこへつなげるのか？そうした感覚に敏感になるのはどこか「旅」に似ているとも言えなくもない。だんだんそうした技能に習熟して来て、その都度きちんとミッションが達成できるようになると、それは「移動の技法」と呼べるようなものになるだろう。「移動の技法」そのものが「プロジェクト」であるような相貌を見せるようになる。さらにはそうして「移動」して結んだ点と点を内に畳み込んで設計したプロジェクトにも、同じような「旅」の風景が広がるのだ。どこに誰とどうやって行くのかをその都度考えないといけないのだ。

7. 私たちはおそらく同じ衝動に突き動かされていたのだ

さて、2017年10月12日に帰国したと述べたが、翌週には、再び宮崎の山之内に会いに行っている。これも同じように「障害者」に会いに行った「移動」だけれども、彼との関係はもう少し特殊である。初めて山之内に出会ったのは2012年に岡山であったJILの全国セミナーで、その時は挨拶を交わした程度だったけれども、2014年に大阪であった同じセミナーの交流会で同席となり再会した。私たちの業界で噂されていたいくつかの挿話があり、その一つが「介助者を連れてアジアを放浪した障害者がいる」という話だった。その伝説の人が山之内であるとわかったのは、食事をしながら会話しているときだった。そのとき私はすでにコスタリカのプロジェクトの3年目に入っていた。そのため、おそらく私が以前バックパッカーであったことも話しただろう。世の中にバックパッカーはたくさんいるが、私と山之内のように1年という単位で「旅」をするものとはそうそう出会うことはなく、だから山之内との出会いは「障害者」とか「健常者」とかではなく、同じような「旅の経験」をしたもの同士のそれであった。

このときの宮崎の訪問は、同じ年の1月のつくば自立生活センターほにゃらの訪問と同じで、彼が事務局長を務める障害者自立応援センターYAH! DOみやぎきが15周年を迎えるので、その記念行事に参加するのが目的だった。これには、ALSの支援で有名な川口有美子★41が招待されており、この機会を利用して山之内とともに私たちは高千穂などを巡る旅をしている。川口とはFacebookではかなり以前から知り合いではあったものの実際に会ったことはなかった。ずっと彼女の背中を見るように活動してきた、遙か先に行く著名なアクティビストに初めて対面したのだった。こうして点からまたもう1点がつながった。この点はのちにさらなる展開を見せることになる。

そしてこの一週間後の10月29日に、私は今度は東京に向かっている。海老原が始めた「東京インクルーシブ教育プロジェクト」の定例会に参加するためだった。朝に大阪を經ち、会場の最寄り駅である西荻窪に着くと激しい雨が降っていた。改札を出ると海老原が介助者に手伝ってもらってカッパを着ようとしているところだった。会場に着くまでに、車椅子の参加者と出逢い、一緒に向かった。会場近くで、海老原が私にある男性を紹介しようとしたが、その前に私がびっくりして声をあげた。「あっ、田崎さん！」、とである。

ダウン症の子供の父親で、自らも「てんぐるま」★42という団体を運営して活動している田

崎光哉だった。本稿の冒頭で述べた「リメンバー7.26 神戸アクション」には、関西およびその周辺では見慣れない人物が参加しており、それが彼だった。「リメンバー7.26 神戸アクション」が終わった後、近くの喫茶店で交流会が持たれ、そこで田崎が東京からわざわざやって来たこともわかった。その後、彼と詳しく話すこともなくその日は終わり帰宅した。お互いまったく知らずにではあるが、まるで返礼のように、今度は私がわざわざ東京まで出かけて行き彼に出会った。そして、海老原は田崎といっしょにこの「東京インクルーシブ教育プロジェクト」を始めたのだという。いくつかの点が線となって合流し出していて、私は自分の進んでいる道が正しいのだと確信するようになった。

この日の定例会では、DPI 日本会議の尾上浩二★43 と崔榮繁★44 が講師として招かれ、障害者権利条約の一般的意見第4号について解説した。定例会の後に交流会があり、その日私は海老原の家に泊めてもらうことになっていたの、そのまま連れられて東大和まで行った。彼女は好きな日本酒をちびちびやっていたと思う。私は日頃、日本酒は飲まないのだけれど、勧められて少し飲んだかと思う。朝までそうやって会話を交わしていたのだけれど、残念なことに何を話したのかはまったく覚えていない。彼女の有名なオカメインコのポピー、ポーちゃんが親しげに私の脚にとまったりしていた。書棚に深田耕一郎の『福祉と贈与』が並んでいた。その日の私の日誌によると、8時30分に朝の介助の人が来て、10時30分に彼女の出勤に合わせていっしょに家を出ている。

私が参加した「東京インクルーシブ教育プロジェクト」の定例会の約10日後である11月9日、今度は海老原が西宮まで来て、鍛冶が関わって活動を始めた「インクルネット西宮」の定例会のゲストとして話をしている。鍛冶は、2015年に海老原ら取材したドキュメンタリー『風は生きよという』★45を大阪で上映する際に尽力したので、すでに海老原とは親しかった。このようにして、インクルーシブ教育推進での協力が始まったのである。

2018年、年明けすぐの1月6日に、鍛冶と職場のインクルーシブ教育を進めるグループとで、吉祥寺のコミュニティーセンターで開かれた「東京インクルーシブ教育プロジェクト」の1月定例会に出席した。翌日の夜もそのまま海老原邸の「カオスご飯会」★46に呼ばれて参加した。たしかに彼女の著書にあるような「カオス」であり、知った顔では東京都武蔵野市で自立生活を送る筋ジストロフィーの梶山紘平★47、自立生活センター「ステップ江戸川」の工藤登志子などがいた。さらに、『風は生きよという』を撮った宍戸大裕★48、社会学者の深田耕一郎★49、タレントの奥山佳恵★50などもいた。彼ら以外はわからなかったが、その数倍の人たちで海老原邸は埋め尽くされていた。

この後も私は鍛冶を手伝ってインクルーシブ教育推進の活動をつづけるのだけれども、この2017年には「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」を開始するきっかけになった出来事もあり、すでに今回のインクルーシブ教育推進の流れと並行して動き出している。次号(9号)では、いったんその「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」を開始するきっかけとなった出来事まで遡って、その流れを辿り直すことにする。

■註

- ★01 リメンバー7.26 神戸アクション (<https://www.facebook.com/remember726kobeaction/>)
 - ★02 石地かおる (<http://www.arsvi.com/w/ik21.htm>)、または角岡伸彦 [2010] を参照 (角岡 [2010:454])。
 - ★03 ピアカウンセリング講座
(<https://www.jica.go.jp/project/costarica/0602942/news/general/2011052502.html>)
 - ★04 Facebook (<https://ja.wikipedia.org/wiki/Facebook>)
 - ★05 Messenger
([https://ja.wikipedia.org/wiki/Messenger\(%E3%82%BD%E3%83%95%E3%83%88%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/Messenger(%E3%82%BD%E3%83%95%E3%83%88%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A2)))
- 本誌3号で、山口和紀が「社会運動のウェブアーカイブス構築に向けた試論——SNS 運動の何を選び残そうとするのか」と題した論文で、昨今の社会運動で使用される Twitter など SNS 投稿のアーカイブについて論じている。私のコスタリカの職場の仕事でも、より広範囲な社会運動の場面でも、やり取りの多くは WhatsApp で行われている。極論すれば、WhatsApp で何人か関連する人たちを集めてグループを作れば、それで1つの運動を始めることができる。この連載で言及している「筋ジス病棟の未来を考えるプロジェクト」では、この Messenger を多用しており、ここでもプロジェクトの内部で様々なグループが立ち上がり、それぞれがやり取りしている。おそらく誰も全貌を把握できないだろう。
- ★06 CIL 豊中 (<http://ciltyonaka.com/>)
 - ★07 玉木幸則
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8E%89%E6%9C%A8%E5%B9%B8%E5%89%87>)
 - ★08 以下、鍛冶克哉の証言は、2023年5月22日、31日に行ったメインストリーム協会での鍛冶へのインタビューからの引用である (<http://www.arsvi.com/2020/230522kk.htm>)。
 - ★09 入部の経歴については、入部香代子 [2001] を参照 (入部 [2001:332])。
 - ★10 「障害者の自立と政治参加をすすめるネットワーク」
(<https://seijisanka.wixsite.com/home>)
 - ★11 入部 [2001:332] から引用。
 - ★12 一羊会 (<https://www.ichiyou-kai.or.jp/>)
 - ★13 ハートフル (<https://www.npo-heartful.org/>)
 - ★14 渡邊琢 (<http://www.arsvi.com/w/wt05.htm>)
 - ★15 たこの木クラブ (<https://takonoki.net/>)
 - ★16 自立生活センター小平 (<https://cilkodaira.net/>)
 - ★17 青葉園 (https://nishi-shakyo.jp/kourei_syougai/aoba/)
 - ★18 第15回「インクルーシブ教育を考えるシンポジウム」
(<http://www.arsvi.com/ts/20170218.htm>)
 - ★19 障害者生活支援センター・遊び雲 (<http://asobigumo.net/>)

- ★20 栗山については次のような記述がある。「デイケアセンターでの二ヶ月の生活を経て、今後の志信の生活をどうするかについて、阪神障害者センター職員の栗山和久が口を開いた。栗山は神戸大学を在学中に澤田に連れられて天場家を訪れ、何の説明もなしに「とにかくつきあえ」と言われて以降、天場親子とかかわりだした。」(角岡 [2010: 314])。
- ★21 インクルネット西宮 (<https://minnaissy.wixsite.com/inclunet-nishinomiya>)
- ★22 山之内俊夫 (<http://www.arsvi.com/w/yt22.htm>)
- ★23 障害者自立応援センターYAH!DOみやぎ
(<https://www.facebook.com/profile.php?id=100068604040104>)
- ★24 Ana Helena Chacón (<https://en.wikipedia.org/wiki/AnaHelenaChac%C3%B3n>)
- ★25 つくば市の自立生活センターほにゃら (<https://peraichi.com/landingpages/view/honyara>)
- ★26 海老原宏美 (<http://www.arsvi.com/w/eh03.htm>)
- ★27 日韓 TRY2001 については、海老原宏美 [2019] と海老原宏美・海老原けえ子 [2022] を参照 (海老原 [2019:64-80], 海老原・海老原 [2022:31-37])。ここに私がこのイベントに参加して撮った写真がある。
(<https://www.dropbox.com/sh/5562fpicqoko06w/AADIOhgATTpsToX7padYvPkga?dl=0>)
- ★28 「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」
(<https://www.normanet.ne.jp/~duskin/index.html>)
- ★29 ソー・ミンス
(<https://www.normanet.ne.jp/~duskin/alumni-news/no02/person4/index.html>)
- ★30 見形信子 (<http://www.arsvi.com/w/mn08.htm>)
- ★31 自立の魂 (<http://www.jiritama.jp/home.html>)
- ★32 「東京インクルーシブ教育プロジェクト」Facebook (<https://www.facebook.com/TIP.6.11/>)
「東京インクルーシブ教育プロジェクト」ブログ (<http://blog.livedoor.jp/tip2017/>)
- ★33 Nacional Council on Independent Living (<https://ncil.org/>)
- ★34 The World Independent Living Network (<https://www.facebook.com/worldilnetwork/>)
- ★35 Access Living (<https://www.accessliving.org/>)
- ★36 マーカ・ブリスト Marca Bristo (https://en.wikipedia.org/wiki/Marca_Bristo)
- ★37 ジュリー・エスピノザ Julie Espinoza (<https://www.facebook.com/julie.espinoza.35>)
- ★38 Paraquad (<https://paraquad.org/>)
- ★39 「障害のあるアメリカ人法」
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9A%9C%E5%AE%B3%E3%82%92%E6%8C%81%E3%81%A4%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E4%BA%BA%E6%B3%95>)
- ★40 佐藤聡氏インタビュー (<http://www.arsvi.com/2010/20180630ss.htm>)
- ★41 川口有美子 (<http://www.arsvi.com/w/ky03.htm>)
- ★42 てんぐるま (https://www.facebook.com/tenguruma/?locale=ja_JP)
- ★43 尾上浩二 (<http://www.arsvi.com/w/ok09.htm>)

- ★44 崔榮繁 (<https://www.normanet.ne.jp/~duskin/alumni-news/no02/person4/index.html>)
- ★45 『風は生きよという』 (<http://kazewaikiyotoiu.jp/>)
- ★46 「カオスご飯会」については、海老原宏美・海老原けえ子 [2022] を参照 (海老原・海老原 [2022:65-67])。
- ★47 梶山紘平 (<http://www.arsvi.com/w/kk31.htm>)
- ★48 宍戸大裕 (<http://www.daifilm.com/profile.html>)
- ★49 深田耕一郎 (<http://www.arsvi.com/w/fk02.htm>)
- ★50 奥山佳恵 (<https://ameblo.jp/okuyama-yoshie/>)

■文献

- 海老原 宏美 2019 『わたしが障害者じゃなくなる日——難病で動けなくてもふつうに生きられる世の中のつくりかた』, 旬報社
- 海老原 宏美・海老原 けえ子 2022 『[増補新装版] まあ、空気でも吸って——人と社会：人工呼吸器の風がつなぐもの』, 現代書館
- 二見 妙子 2017 『インクルーシブ教育の源流』, 現代書館
- 権藤 真由美 2022 「車いす障害者の海外への「旅」——語りの深化とその先にあるもの」, 『遡航』3:51-70
- 入部 香代子 2001 「障害者として生きることを死ぬまで追い求めて」, 全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化』:328-335, 現代書館
- 角岡 伸彦 2010 『カニは横に歩く』, 講談社
- ピープルファースト東久留米 2010 『知的障害者が入所施設ではなく地域で生きていくための本』, 生活書院
- 定藤 邦子 2011 『関西障害者運動の現代史』, 生活書院
- 佐藤 聡 i2018 インタビュー 2018/06/30 聞き手:立岩真也・権藤真由美 於:東京・戸山サンライズ <http://www.arsvi.com/2010/20180630ss.htm>
- 鍛冶 克哉 i2023 インタビュー 2023/05/22,31 聞き手:井上武史 於:メインストリーム協会 <http://www.arsvi.com/2020/230522kk.htm>
- 全国自立生活センター協議会編 2001 『自立生活運動と障害文化』, 現代書館

■案内

本連載は、大幅に増補・改稿したのち、立命館大学生存学研究所より刊行予定の叢書の1冊に収録する予定である。詳しい情報は「叢書 身体×社会」(<http://www.arsvi.com/ts/s.htm>)にて随時更新する。